

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red
Cross Kyushu International College of
Nursing

18号 奨励研究・指定研究等(報告書)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日本赤十字九州国際看護大学, 東, 優里子, 高橋, 清美 メールアドレス: 所属:
URL	https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/706

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



奨励研究・指定研究等
(報告書)

平成 29 年度採択分

令和元年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究報告書

整理 番号	# (17-1) 奨励・指定	研究代表 者氏名	東 優里子	職位	助手
研 究 組 織	氏 名	職 位	役割分担		
	研究代表者：東 優里子	助手	研究全般		
	研究分担者：なし				
研究課題名 新卒小児看護師が 1 年以上の勤務を継続する原動力となった体験					
研究実績の概要 (抄録程度の研究の目的、方法、考察、結果を記載してください。)					
【目的】 勤務継続の原動力を獲得していく新卒小児看護師の体験を明らかにすることである。					
【方法】 看護師経験 2 年目の小児看護師 4 名を対象に半構造化面接を行い、探索的質的研究を行った。本研究の目的は、研究参加者の体験の内容を明らかにすることであるため、個人分析まで佐藤による質的データ分析法を参考に分析を行った。個人分析の手順は、逐語録から意味のまとまりごとにデータを抽出してセグメント化を行い、抽象度を上げて定性的コード、焦点的コード、概念的カテゴリーを作成した。さらに本研究では、研究参加者個々同士の共通性と異質性の観点から全体分析を行い、個人分析から生成された概念的カテゴリーの内容と一連の体験のプロセスを意識しながら、抽象的なカテゴリー名を割り当て、コアカテゴリーを作成した。					
【結果】 研究参加者 4 名の個人分析の結果、55 個の概念的カテゴリーから、【小児看護に求める理想と期待】【身の置き所がない立場】【価値観の転換】【共感を得られる同僚からの支え】【あらゆる気持ちを打ち明けることで取り戻す心の安らかさ】【緊張感が漂う環境で抱え込む精神的負担】【自己を奮い立たせた体験から生じた勤務継続意思の地固め】【冷静になって導かれた、離職を踏み止まる糧】【体験の積み重ねによる自信と自己の立ち位置の獲得】【実体験に基づく具体的な目標の確立】という 10 個のコアカテゴリーが抽出された。					
【考察】 新卒小児看護師が勤務継続の原動力を獲得していく鍵は、新卒小児看護師の価値観を揺るがす困難な体験であった。その際に、新卒小児看護師は同僚からの支援を受けながら、目標を見出すことが重要であった。					

研究発表の方法 (大学紀要もしくは学会誌であれば誌名、ならびに投稿時期を記載する)

研究結果の一部は、学内報告会で発表するとともに、日本小児看護学会第 29 回学術集会にて口頭発表を行った (2019 年 8 月 4 日)。今後は、関連学会誌投稿する予定である。なお本研究は、日本赤十字九州国際看護大学大学院の修士論文と同テーマの研究であるため、平成 30 年度日本赤十字九州国際看護大学大学院の修士論文発表会にて発表を行った。

平成 30 年度採択分

令和元年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究報告書

整理 番号	# (18-3) 奨励・指定	研究代表 者氏名	高橋清美	職位	教授
研 究 組 織	氏 名		職 位	役割分担	
	研究代表者：高橋清美		教授	研究全体統括（演習担当、教材作成、分析、論文作成）	
	研究分担者：有安直貴		助手	演習講師・教材作成・分析・論文作成）	
	研究分担者：石飛マリコ		准教授	分析・論文作成	
	研究分担者：川田陽子		専門看護師	演習支援・調査	
	研究分担者：花木かおる		認定看護師	演習支援・調査	
研究課題名					
精神科看護師を対象とした窒息への支援教育プログラム評価					
研究実績の概要					
<p>本研究の目的は、窒息への支援教育プログラムを受講者した看護師が、窒息しやすい精神障がい者の支援に対する意識変化、ならびにプログラム効果をどのように認識しているのかを明らかにし、プログラム評価を行うことである。研究方法は、精神科病院勤務の看護師に院内研修を実施し、研修への期待度や満足度評価、研修過程の評価ならびに研修目標の達成度評価、研修 1 週後と 2 か月後での看護支援への意識変化とプログラム効果を評価し、プログラム改善に向けた考察を行う。プログラム評価によって、更にプログラムが改善されると、院内教育の題材として本プログラムが利用されることが予測される。窒息防止が促進されることは、患者にとって安全な治療環境を担保することにつながる点は意義がある。</p> <p>研究デザインは、アクションリサーチであり、研修会に参加する対象者は、精神科病院 2 施設に勤務する看護師（計 40～60 名程度）である。研修終了後にインタビューする対象者は、研修の受講者で研究の協力が得られた看護師（計 4 名）であった。</p> <p>結果より、2018 年 X 月 P 日の日勤終了後に A 病院 16 名の看護職員に研修会を実施した。パンフレットに対する意見交換では、文字や紙面の大きさが不適切、イラストが見にくい、パンフレットの使い方説明書が必要、窒息しやすい食材と食品を別々に記載した意図が見えない等の意見があった。期待度は 77.4%で満足度は 86.6%、窒息の知識は受講前が 90.6%で受講後は 98.1%、研修過程評価スケールでは 91%の項目でポジティブな回答だった。</p> <p>2018 年 X 月 P+7 日、日勤内で B 病院 14 名の看護職員に実施した。期待度は 78.6%で満足度は 83.2%、窒息の知識は受講前 93.6%で受講後は 100%、研修過程評価スケールは 87%の項目でポジティブな回答だった。パンフレットの意見交換は、対象者の理解に応じた内容をいくつか作成し選択する、嚙下に注意する食材のみを掲載する等</p>					

の意見があった。満足度が期待度を下回った受講者 3 名のコメントには、講義内で事例を入れてほしい等の意見があった。

考察

パンフレット内容は、窒息しやすい食材やメニューのイメージを掲載し、看護師と患者の対話が広がることを狙ったが、意図が伝わりにくいため、ガイドブック作成を検討する。2 施設とも知識確認テストは 5~6 ポイント上昇、満足度のほうが期待度より高い、院内研修評価スケールも肯定的意見が多かった。受講者からの評価は概ね良かったため、意見を参考に改善を重ね開発を進めることとした。

研究発表の方法 (大学紀要もしくは学会誌であれば誌名、ならびに投稿時期を記載する)

2019 年度に日本摂食嚥下リハビリテーション学会誌に投稿予定だったが、研究者の異動等含め計画通りに進んでいないため、2020 年度中に日本摂食嚥下リハビリテーション学会に投稿を行う。